隣人について知っていたことといえば、妙に早起きをしているということだけだった。しかし今は、彩紗美南という名前であることと左鎖骨下にほくろがあることを知っている。机を挟んで前に座る彼の服の下にそれがちらと見えてしまっている。彼女のそれらはとても映えていた。……ああそれと、とても社交的で会話が好きということもか。

「やっぱり今日はちょっとアツいですね」

「そうですね。昨日まではあんなに秋らしかったのに」

「たしかに！　昨日はけっこうすずしかったですね。朝のトレーニングの時、体が汗でひえて戻った後にお風呂入っちゃいましたよ」

「ああ、やっぱり。朝早起きしてるのって運動のためだったんですか」

「え、あ、そうなんです。……ご存じだったんですか」

「決まった時間に部屋を出てまた戻ってくる音が聞こえてるので、走ってるのかな、と」

「じつはそうなんです。……久人さんも結構早起きですね」

「そうですね。五時には起きるようにしてます」

「わ、同じだ」

彩紗さんはそう言うと、なぜか黙ってしまった。会話が途切れたらなにか気まずくなってしまうような気がした。私はメニュー表を手に取り、開きながら訊いた。

「なに、頼みます？」

私たちはちょっとした偶然からアパート近くのひっそりとした場所にあるレトロな喫茶店に来ている。店内の電灯は極力排され、大きな窓から差し込むひかりがやさしい。

「あ。じゃあ、わたしはマロンパフェを」

メニュー表を見るまでもなく彩紗さんは答えた。マロンパフェは通常のメニュー表にはなく、季節限定、と大きく書かれた一枚のラミネートされたメニュー用紙にあった。それはまさに栗尽くしだった。パフェ本体の大部分が栗で覆われ、その頂点には当然栗。

「えっと、じゃあ私はどうしようかな……」

パラパラとページをめくる。最後まで見ることなく、すぐに決まった。よし、チーズケーキとホットコーヒーのセットにしよう。この組み合わせにはずれはない。

「すみませーん」

カウンター内で常連のお客さんらしき人と話しているお店の人に声をかける。髪を後頭部で結んだ店員さんは話をすぐに切り上げて来てくれた。

「お待たせしました。ご注文はいかがいたしましょうか」

「彼女がマロンパフェで、私がこのチーズケーキとコーヒーのセットで」

「ホットでよろしいですか？」

「え、ああ、ホットでお願いします」

しばしお待ちくださいませ、と店員さんは言い残してカウンター内に戻った。

「災難でしたね」
「え？」
なんのことか一瞬わからずつい訊き返したが、すぐに思い当たった。
「お互いにですよ、それを言うなら」
一時間前、扉を何度も叩く音と物騒な言葉と女性の叫び声で目を覚ました。詳細は知らないが、何はともあれ扉を叩いていた男は警察に連行され、住んでいるアパートの周りには警察と野次馬が集まって二度寝どころではなくなってしまった。そして私にとっての二度寝は、隣人にとっての読書だった。玄関先で顔を合わせた私たちは、その時に初めてまともに顔を合わせた。日常の中で互いを認識することはあったが、まともに会うのは初めてだった。
「まさか警察沙汰をあんな近くで見ることになるとは考えてもいませんでしたよー」
「でも、こうやって話せて私は嬉しいですよ」
まともに会うのははじめてだったが、どういう人なのかは知っているつもりだったし、それを確かめてみたいともなんとなく思っていた。そんな機会はこないだろうと思っていたけど、今回まったく思わぬところから来た。
「……八井田さんって、口がうまいですね」
それはつまり女性慣れしてそう、ということだろうか。もしそうなら否定しなければ。
「純粋に、ふつうにそう思ってますよ」
「それはわたしもですよ。べつに悪い意味で言ってないです」
『わたしも』……。
「そうですか、それならよかった」
水をひと口飲んで、置くのと同時に訊かれた。
「そういえば、八井田さんはなんで早起きなんですか？」
「弁当作ったりとか、読書のためですね」
「へえ、読書ですか。なに読んでるんですか？」
「今は図鑑とか短編集とか読んでます」
「ははっ、正に本の虫ですね」
「彩紗さんも本好きじゃないですか？　違いますか？」
「え、どうしてそう思うんですか？」
「古本祭り帰りに見かけました」
しばし、こんなふうに話をした。
しばし、はあっという間に過ぎ去った。店員さんが一度にすべての注文を持って来た。声を揃えて、器用だなあ、とこぼした。そしてマロンパフェは思いのほか大きく、チーズケーキは想像を上回る濃厚さだった。
そして夕食を食べたイタリアンの〆のティラミスはもっとおいしかった。